

令和元年度第2回北広島市立小学校及び中学校通学区域審議会 会議録

日 時	令和元年8月26日（月）18：30～19：30
会 場	市役所4階 会議室
出席委員	高山隆二会長、遠藤均副会長、岩本麻実委員、前田優委員、的場睦子委員、河村英俊委員、佐々木一友委員、高橋浩子委員、高橋潤一委員、佐藤寿昭委員、新田邦広委員
欠席委員	安藝崇典委員、山口朋子委員
市出席者	【教育委員会】千葉教育部長、津谷教育部理事、下野教育総務課長、河合学校教育課長、富田小中一貫・教育施策推進課長、澤井主査、佐藤主事

1 開会

2 会議の成立について

「委員の過半数が出席していることから、委員会が成立していること」を確認し、会議録の署名委員の指名を行った。

3 議事

前回の審議会で意見のあった特別支援学級数等の推移、各地区の小中学校の状況について説明をし、適正規模の検討にあたっての考慮すべき視点、学級規模による小中学校の具体例、答申案のひな形について、事務局から資料に基づき説明を行った。

【説明事項に関する質疑応答】

◆ p.1～p.2

質問等なし

◆ p.3～p.8

【A 委員】

これからの推移について小学校は令和6年までで、中学校の令和12年までの理由について

【事務局】

現在の住民基本台帳にいる0歳児以降の人口からそのまま引き上げた推計をしております。ですので、0歳児の子が6歳で小学生になり、12歳で中学生になるところまでしか推計できないためです。

【B 村委員】

8ページ④で、令和元年度が生徒数277人8クラス、令和6年度が生徒数257人9クラスという理由について

【事務局】

令和元年度の2年生が少ないため、令和6年度では平準化されたためこのような数字になっております。

【C委員】

たまたま人数差があつて基準値だけでは計算できないですね。

◆ p.9～p.10

【A委員】

前回の審議会において、小学校において12学級から24学級までを基本とするという答申がされたということで、今回は、小学校も含めて中学校の方の適正規模も審議していくということで、今まで中学校の規模について審議されてこなかったという前提の中で、中学校の新たな視点で検討していかなければならないところであると思うが、前回の審議会で小学校の12学級から24学級に決まった数字について、児童生徒数が減少していく中で学校規模を見直していただきたい、もしかすると、前回と同じ規模でいいのかという想定もしていくなかで検討を進めてよいか伺いたい。

【事務局説明】

前回の平成17年度の審議会においては、当時の大曲東小学校が24学級前後で推移しているというところがありますので、これが考慮されたことと、当時の大曲東小学校が一番大きな学校でありましたが、平成19年度以降急激に減っていくことが推定されていたことから、その段階で校区等の変更を行うのがどうなのかということが考慮されていたところですが、今回につきましては、そこまで大きな学級数になる学校が見込まれる学校がないことから、前回の答申の内容が、現在において果たして適切なのかどうかについても合わせて審議していただきたいと考えているところです。

【C委員】

24学級に近い数字となる小学校は現状ないですね。

【A委員】

国の基準が当時も18学級以下であったにもかかわらず、24学級という答申になったということは、当時の審議会の中でも24学級という許容範囲の中でやれているという現状があるという分析であったと想定すると、今後、今の現状で各学校が学校運営とか教育活動を行っている状況が適切に行っているのかというあたりを重ねていかなければならないのかと、それと、今後児童生徒数が増えていく、いかないという前提があると話が変わってくるのかと思います。

【C委員】

今回出てきている数字を見てみると、そこまでいかないと言えるんじゃないでしょうか。

今の状況で児童数が700人、800人の子どもたちになる学校という状況はあり得ないと考えていい数字ではないか、両方合わせたら近い数字になるところもありますが、現場では18学級という数字が望ましいのではないかなど、簡単に18学級という数字をここで出していいかどうかは分かりませんが、現場サイドという声も含めて考えるとそう思いますが。

【B委員】

24学級まで増える状況にないことを踏まえると18学級ぐらいがいいのかなと。

【A委員】

現実的な数で考えていくと、一番枠を想定しやすいのではないかと。

例えば、各学年1学級ずつの短学級の学校があった場合、短学級だと教育上の問題があるなどの意見があれば、そうじゃない方が望ましいということをもとめないとならないし、その方向も見つめないとならないし、そのあたりをいろいろ分析していくと一番いいのかなという想定の中で、少なくともどのくらいで教育効果が一番あるのかを、児童数ではなく学級数で、もちろん細かい児童数もありますが、考えていけばいいのかなと、上限にしても、あまりに想定できない上限を設定するのも問題があるのかなと、改めて今の学校の現状の中で15学級16学級の最大の数の中で、どのくらいのキャパでできるのか今の北広島の教育の現状とバランスをとりながら考えていくと考えやすいのではないかと感じました。

【C委員】

その辺を頭に入れながら、次のP11からの具体例の説明を聞きたいと思います。

◆P.11～p.13

【B委員】

私が昔6年担任だったときの経験の話ですが、以前ちょうどP13の具体例と同程度の学校に勤めておりました。600から700人近い学校でありましたので体育館がちょうどびっちり、運動会や学会も子ども一人ひとりの活躍の場が減ってしまう状況でした。ただ、先生方としては、専科をもてたり、先生方同士の切磋琢磨もあるし、学校全体としての盛り上がりや活気がある感じでしたが、この人数あたりが限界といったらおかしいですが、これを超えてくると全学年4学級ずつになると、ちょっと厳しくなってくるのかなと、ただ範囲とすると1学年2～4学級の範囲なのかなと、そういう感じでした。

13Pの例ぐらいだと学校としては活気があるかなと感じました。ただ、休み時間なんかは、当時サッカーとかが流行っておりましたので、グラウンドがびっちりびっちり、かなり制約をうけたりとか、体育館の割り振りもかなりあるかなという状況でした。

今の私の学校は、各学年2学級ずつなので、グラウンドも体育館ものびのびと使えています。

そういう感じで、各学年3学級当たりが基点になってくるのかなと感じました。

ただ、結局は、学年3学級から2学級になるとき、2学級から1学級になるときが一番大変なのかなと、1学級当たりの子どもの数がひっかかってくるのかなと、私の個人的意見としてはそう思います。

【C委員】

個人的な意見で大丈夫です。最大規模が18学級ぐらいが、現段階では望ましいという意見ですね。

【B 委員】

18 学級なんだけど、規模としては 24 学級までなのかなと思います。

P.14～P.17

【D 委員】

ページが戻るんですが、具体例の中で、P13 の小学校の例について、東部小学校と北の台小学校の児童数を合わせた令和 6 年度の資料と伺ったんですが、学校規模の上限を考えると、こうなることもあり得るという想定の中で上限を考えなければならないのか、現状の小学校数、中学校数の中で学級の上限を考えるのか、という疑問を思ったんですが。

【事務局】

お示しした資料は、イメージを持っていただくために、仮にこうなったらこうなりますというシミュレーションとして捉えていただければと思います。

先ほど 10 ページに下にありますが、子どもたちにとって、より良い学級数はどれくらいの幅にあるのかというところを今回答申いただくということが一番最初になります。

そのうえで、そのあと具体的にどのような手立てがでてくるのか、ソフト的な部分であったり、ハード的な部分もありますが、その点につきましては来年以降の審議事項と考えております。

◆P.18

【C 委員】

今日の会議の中で、イメージできるこの学級数の何学級から何学級までというのを、小学校、中学校で何学級ぐらいでしょうねというのを審議していきたいと思います。

観点については次回の審議会で審議していきたいと思います。

まず小学校についてですが、今までの話をまとめさせていただきますと、各学年 2 学級ということであると、12 学級からというスタートの数字になり、前回の答申を踏まえると 24 学級という答申ですが、先ほどの論議の中で、そこまでの市内的な数字にならないのではないかと、18 学級というのが現実的な数字になるのではないかと意見があり、私もそう思いますがいかがでしょうか。他の委員のみなさんのお考えはいかがでしょうか。

うなずいている委員さんもたくさんいらっしゃるから、それでは、審議会の中では、小学校は 12 学級から 18 学級、1 学年 2 学級から 3 学級というふうに入れさせていただきたいと思います。

中学校の方は、スタートは 1 学級ではないと思いますので、1 学年 2 学級として、6 学級から上限はまだ具体的な数字は出てきておりませんが、国は 18 学級をとっていますが、いろんな免許の関係、生徒たちの学習環境を考えた時に、具体的に令和 12 年度の推計の中で、具体的に 18 学級まで行く中学校はない状況の中でいかがでしょうか。

【A 委員】

最低ラインでは考えられないのだと思います。小学校も中学校もだいたい見えていて、単学

級規模では考えられる効果よりも課題が非常に多いのは、この資料見てもわかるのかなど。

現状としては単学級でもやっていけているけれども、子どもたちの教育をみていると、理想的なのは複数学級のなかで切磋琢磨できて、教える先生も色々関わってこられる体制が学校にあれば子どもたちの環境も良くなるし、もちろん地域の方々も入ってもらえるようになるし、そういうことを考えると、単学級規模は、あまり理想として考えるべきではない。

逆に小学校の最大のレベルでいうと、小学校が校区で2つあったときに最大各校3学級、2校合わせると最大6学級、6学級規模は北広島の最大レベルで、その規模で学校としてできないわけではないけれど、なかなか子どもたちの安全管理とかの部分で手薄になってしまったり、大変になってしまったりするレベルかなというところまでいくのではないかなど。

当然それを超えたら20学級とかいってしまったら、管内でも千歳の勇舞では学年最大7学級規模を見込んでいる。そうしないと学校を分離するという状況になるという情報も。それに特別支援学級が入ってくると施設上の問題も絡んでくる。それは今日の議題ではありませんが、教育上とか学校運営上の問題とすれば、そこを小学校の最大として揃えた時に、中学校の最大もそれを想定した数にしないといけないだろうし、それで持つだろうかというバランスのところかなど。

【C委員】

各学年3学級ということになると、現実そういう中学校があるということ踏まえると、18学級という数字が適当ではないかというご意見でよろしいでしょうか。

現実と理想と両方を加味して審議していなければならぬ現実を踏まえているんな部分を考えていかなければならない状況ですが、そのほか意見はいかがでしょうか。

【C委員】

それでは、中学校については6学級から18学級という数字を入れさせていただいて、1学年当たり、2学級から6学級という数字を入れさせていただきたいと思います。

小学校及び中学校の観点については、次回の審議会で審議していくこととします。

【E委員】

確認したいんですが、小学校12学級から18学級、中学校6学級から18学級というのはあくまでもひとつのスタンダードであって、必ずしもこれにしばられるものではないというか、これよりも上であつても下であつても、許容できるということですよ、この数字を設定することによって、ここからもれる学校について、それについてどういうふうに対処していくのかをこれから考えていくという趣旨でよろしいでしょうか。

【C委員】

まったくそのとおりです。

【事務局】

今回数字を示していただいて、次回議論のまな板に乗せないということで進めていく、そこ

令和元年度第2回北広島市立小学校及び中学校通学区域審議会 会議録

から上だったり、下だったりではみ出した学校についてはどういった手立てをすれば、より子どもたちの教育環境により良いのかということを総合的に考えていただいたうえで、次はどうするかというような議論をしていただくので、今回はこの数字がそのまま学校を縛るとか、そこから即合併ですとか分離ですということではないということをご理解ください。

◆その他（次回の予定など）

事務局から説明を行った。

4 閉会

会議録署名委員

岩本 麻実
